

特集の意図

ジェームズ・パーキンソンが「振戦麻痺」を提唱してから今年で 202 年を迎える。本特集では、この変遷をひもときパーキンソン病の理解を深めたのち、現在考えられている病態や治療法を整理し、未来へとつながる最新の研究内容を紹介する。パーキンソン病の診療に携わる医療者にご一読いただき、パーキンソン病診療の現在地を確かめてもらいたい。

特集の構成

1. 【鼎談】パーキンソン病の過去・現在・未来 [水野美邦×武田 篤×神田 隆(司会)]

この 202 年の間にパーキンソン病の病態や治療はどのように研究され発展してきたのか振り返り、現在の診断・治療の考え方、そして、今後期待される治療について議論する。さまざまなエキスパートオピニオンを明日からの診療に役立てていただきたい。

2. 「振戦麻痺」から「パーキンソン病」へ — 「現代の眼」からの再検討 (河村 満, 他)

パーキンソン病 (PD) の最も有名な症例である 2 例が、実は PD の非典型例、あるいは PD ではない疾患である可能性を、シャルコーヤデジュリンの記述をひもとき、情報が蓄積され診断の技術が進んだ現代の視点から考察する。

3. パーキンソン病の初期治療を改めて考える — 私見を交えた新規ガイドラインの解説 (武田 篤)

『パーキンソン病診療ガイドライン 2018』はどのような根拠をもって改訂されたのか改めて整理する。そのうえで、ガイドラインには記載しきれなかった薬物の用法や非薬物療法の考え方を、私見を交えて論じる。

4. パーキンソン病の認知機能障害 — 診断と治療のオーバービュー (白石朋敬, 他)

パーキンソン病に伴う認知機能障害は、遂行機能障害、注意障害、視空間認知障害、記憶障害、社会的認知障害が知られている。その中でも、前頭葉症状と運動症状の間には相関が見られ、無動、姿勢保持障害、歩行障害を持つ患者は認知症を発症するリスクが高い。

5. 家族性パーキンソン病と疾患特異的 iPS 細胞 (田端芳邦, 岡野栄之)

iPS 細胞関連技術によって *GBA* 遺伝子はパーキンソン病 (PD) の確実なリスク遺伝子であることや、ミトコンドリアの機能亢進が PD の治療標的となる可能性が示されている。著者らの研究からは、T 型 Ca^{2+} チャネルを介した細胞内 Ca^{2+} レベルの調節が PD の発症や進行を抑える新たな治療標的となることが示唆される。

6. DBS の適応 — その治療の歴史および病態生理から考える (下 泰司, 他)

脳深部刺激療法 (DBS) の適応となる対象や時期の考え方を詳述する。ターゲットは、ウェアリングオフに対する著明な効果と、薬剤の減量が見込まれる視床下核となることが最も多い。次いで、ジスキネジアなど不随意運動が著明な場合には淡蒼球内節を、振戦を選択的に抑制する場合には視床腹中間核をターゲットとする。